上野東照宮：大石鳥居

巨大な石の鳥居（神社の門）が、上野東照宮の境内への入り口を示しています。その頑丈な作りと平凡な姿は、1633 年から続く、苦難と時には謎に満ちた歴史を代表しています。大石鳥居は、大名の酒井忠世（1572 年〜1636 年）が、主人であった徳川家康（1543 年〜1616 年）を讃えるために建てたものです。徳川幕府の創立者である家康は、酒井を味方として信頼していました。死後に神格化された家康は、1627 年以降、上野東照宮に祀られています。酒井は、鳥居のために、遠く離れた備前国（現在の岡山県）から高品質の花崗岩を確保しており、出費を惜しみませんでした。

酒井による巨大な鳥居は、およそ 50 年にわたり安らかに佇んでいました。ところが、天和時代（1681 年〜1684 年）のある時点で、鳥居は解体され埋められてしまいました。その理由は分かっていませんが、江戸時代（1603 年〜1868 年）には同様の事件は珍しくありませんでした。社会的地位の高い一族であっても、様々な理由で支持を失うことがありました。こうして身を落とすと、当人たちのモニュメントが撤去されることもしばしばありました。どのような理由で一時的に撤去されたにせよ、鳥居は 1734 年には酒井忠世の子孫である酒井忠朝（1710 年〜1772 年）によって掘り起こされ、元の場所に立て直されたことで、復活を遂げました。鳥居の根本は最大で地下 4m の深さに埋まっているからか、鳥居は 1734 年以降、東京を襲った自然災害や人為災害の全てに耐えてきました。なかでも 1923 年に起きたマグニチュード 7.9 の関東大震災では、東京が壊滅し、10 万人以上が犠牲になりました。大石鳥居は重要文化財に指定されています。